

◆年古りて、寒さとコロナ禍にこもっているうちに、今までのような交流が出来なくなった。言われなければ物事が進まない。その一つに原稿のメ切が近づいて来ると思いつつも、切羽詰まらないと心も体も動かない。慌てるとますますまともな歌が出来なくて、悩みながらそれでも何とかまめなければと、自分を赦すことに心苦しく思いながら出してしまおう。

市川茂子

◆十四年ぶりにやっと二番目の歌集の原稿が固まりつつある。この歳月は東日本大震災が起り、東京電力の福島原発爆発という人災が重なった。沖縄では辺野古を容認した現職をやぶり、自民党の県連会長であった翁長雄志氏が新基地反対を掲げ圧勝した。翁長氏は、国への渾身の訴えを無視される沖縄の民の心を「魂の飢餓」と語ったが、日米の強大な圧力と闘い続け癌に斃れた。沖縄に、福島に、宮城に足を運んだ記録と雪国の四季の中にある日常のつぶやきの一冊を皆さんのものにお送りしたい。数首でも心に留めて頂けることを願っている。

梅津純子

◆学校勤務を今春辞めることにしました。長年の、十代と共に過ごせる大切な大切な日々と、遂に決別。決まってからは、振り返るでもなく先を期待するでもなく、「ありがたい今」をフワツとした感じで過ごしています。生徒たちをネタに詠めなくなったとき、退職の実感がわくのでしょうか。

大橋千佳子

◆二月も末になって、朝の日差しが眩しく感じられるようになってきた。こういう日は早朝気温がぐっと下がって堅雪（かたゆき、雪が締まって堅くなること、またその上を歩くこと）になる。子どもの頃、堅雪をしながら学校に行くことが楽しみでもあった。今は許されない光景になってしまったが……。山形にももうすぐ春が来る。「木灰を撒きて出羽の春動く」

神村ふじを

◆日中一人で家にいる時間が長い。それで、つかかってくる電話に出してしまう。リサイクル・ショップから、と生命保険の代理店からの電話が多い。そういうことにも時代があるかもしれない。後者は、保険の見直しをすすめるもの。ところで、ことし七十五歳になろうというところ、終活のつもりで、（年会費の負担がある）クレジット・カードの解約、（掛金が少額のままの）生命保険の解約、それに組合員であることが長くなっていった生協からの脱退、などをした。手続きは連絡するだけという簡単なものから、やや面倒なものまであったが、そのあとで、何かアイデンティティが薄まったような気がしたのは、不思議なことだった。

小野澤繁雄

◆二月二十五、二十六日福島県二本松市で「第49回日本有機農業研究会全国大会」があり参加した。福島県は有機農業が盛んである。二本松市には大内信一さんという有機農業のパイオニアがいる。県知事だった佐藤栄佐久氏が一九九〇年代県の方針として有機農業を推進してきた。原子力災害の影響で有機農業に舵を切る農家、特に若者が増えている。二十五日には全国各地から約三百名が参集した。若い人が目立った。テーマは「原発事故から十二年―食とエネルギーを考える」で、研究者、農業者らの実践報告があった。農業と太陽光発電を組み合わせた複合農業経営の取り組みは注目に値する。六ヘクタールの農地に九五〇〇枚のソーラーパネルを設置し、その電力を地域電力会社に売っている。ソーラーの下では大豆、エゴマ、ブドウなどを栽培している。このソーラーシェアリングはドキュメンタリー映画「原発をとめた裁判長　そして原発をとめる農家たち」に登場し、観た人々にも希望をもたらしている。震災後の十二年間に福島の有機農家がつくってきたネットワークの大きさ、層の厚さに驚嘆する。私たち白鷹町の弱小有機農家にそんな底力があるとは、とても思えない。二十六日の現地見学会では、東日本大震災・原子力災害伝承館と震災遺構・浪江町立請戸小学校を訪問した。燃料高騰の今、世論調査では原発再稼働に賛成の声が高まっているという。賛成の人々にこそ見て原子力災害の恐ろしさを学んでもらいたい。

新野祐子

